

## 介護福祉士資格取得一元化に向けた、教育視点のあり方(2)

－国家試験対策の取り組みと課題－

荒 木 隆 俊	専攻科福祉専攻
宮 地 康 子	専攻科福祉専攻
松 田 水 月	専攻科福祉専攻
伊 藤 和 雄	専攻科福祉専攻

(2017年10月30日受理)

### 〔 要 約 〕

今年度から、介護福祉士養成校卒業生に対しても、介護福祉士国家試験が義務付けられた。この事実が及ぼす影響は、介護福祉士養成校にとっても介護現場にも大きな影響を与えるものと危惧している。

そこで、本稿は、本学における介護福祉士国家試験受験対策について、これまでの取り組みから課題を探っていくものである。

### I. はじめに

昭和63年(1988)の介護福祉士制度の施行から現在に至るまでの間に、高齢者介護や障害者を取り巻く状況は大きく変わってきている。特に近年は、介護福祉士養成校(以下、養成校)では、定員充足の問題、介護現場では、離職率も高く労働移動が激しい職種とされ常態的に求人募集が行われている。双方にとって、このような深刻な事態は先の見えない状況にある。

本学は、幼児教育、介護を学ぶ教育機関である。短期大学で保育士資格、幼稚園教諭二種免許状等の資格を取得後、保育士資格を養成校で取得した者に対しては、介護福祉士資格を1年課程で取得させる専攻科福祉専攻(以下、専攻科)を、平成2年度に開校した。

しかし、資格取得方法の法改正に伴い、平成29年度(2017)から養成校修了者は介護福祉士国家試験受験資格を得ることになる。

現在の介護福祉士資格取得の一般的な養成課程は2年課程が多い。しかし、本学のような1年間の養成課程で国家試験の受験資格を得て介護福祉士の資格を取得することは、3年の間に保育士、幼稚園教諭二種免許状、介護福祉士資格の資格を取得できることになり、今後の人口推移等から推測してみても魅力ある資格といえる。

そこで筆者らの先行研究<sup>(註1)</sup>における介護福祉士資格取得一元化に向けた教育視点のあり方について新たに探り、これまでの介護福祉士資格制度の変容とその背景から見えてくるものを手掛かりとして検討を行った。

その結果、制度の変容については、資質の向上を図るため、すべての者は一定の教育プロセスを経た後に国家試験を受験するという形で、介護福祉士の資格取得方法を一元化するとし、養成校側の自助努力による資格保証化が進むことと並行し、介護福祉士養成が始まり四半世紀が経過する中で、介護を取り巻く状況も変化してきた。

さらに、今年度より再々延期を繰り返してきた資格取得ルートの変更に伴い、養成校卒業生にも国家試験受験が義務付けられたことにより、明確な目標概念を掲げて、それに基づいて体系的な価値概念を根幹に置く専門教育が必要となることはいうまでもなく、介護福祉士の国家資格についても一定の水準を満たす「養成目標」として示すことになったといえ、養成校の評価も見える形で位置付けられることを意味するものである。

しかも、前述した通り、本学の1年課程の学生は、保育士養成施設等を卒業し保育士資格取得者を対象とする養成課程である。これは、保育士養成課程において、社会福祉、心理、発達及び障害などについて一定程度履修していることを前提として成り立っている。

筆者らは、介護のできる保育士、保育の心を持った介護福祉士として現場から寄せられる期待も大きいと認識している。つまり、幼児期から高齢者までをトータルにサポートできる福祉の専門職を育成するという使命を担って授業を組み立てている。

また、養成校卒業生にも国家試験が義務付けられたことは、1年間という限られた短期養成期間の中で、

保育士養成課程の履修科目の知識や保育実習の経験が、実際、どのような教育的効果をあげて実践に結びついた学習になっていたのかについても真価が問われてくる。そういったことも認識しながら、「生きるとは」、「人の一生とは」といったことを考える場であり、子どもであれ、障害者であれ、高齢者であれ、「対象者の表情を読み取って仕事のできる専門職者」を目指し、援助を通して関わり合う方々の「人生経験や思いに近づく人としての共感能力」を高めていく力を身に付けさせたいと伝えてきた。

つまり、養成校卒業生にも国家試験が義務付けられた以上、一定の「基礎学力」は必須となるため、これまでも重要視してきた学習を通して介護とは何かを理解・再認識し、基礎的な実践能力を習得する場を大事にしながらか、そこから見えてくる「基礎学力」といったものへの学生自らの気づきを期待したい部分も大きい。将来、保育士、幼稚園教諭に加え介護福祉士という職種を担っていく人材を育てることを考えれば、介護学習を基盤としていかに一定の「基礎学力」を身に付けさせていくかということは大きな課題である。

以上のことから、本稿は、介護福祉士国家試験受験対策（以下、受験対策）として、現在取り組んでいる経過を振り返り課題を探るものである。

## II. 入学前指導

そもそも、本学短大に入学してきた目的として、本来、保育士・幼稚園教諭二種免許状の資格取得を目指している学生がほとんどである。

つまり、短大での学びは保育士資格、幼稚園教諭二種免許状取得に関する科目中心となる。

本学の幼児教育科には、幼児教育コース、福祉コースを設け、各学生の選択によりコース分けと科目履修ができる特色を持たせている。ほとんどの学生は、介護・福祉に関する内容に触れることは限られてしまうが、専攻科入試合格以降入学までの間に、特段、入学前指導というものはこれまで実施していなかった。

昨年度は、専攻科の学内選考が10月中旬に実施され、一期試験は11月中旬に実施され現入学者は決定している。

そこで、昨年度、初めて入学前に国家試験に向けた受験対策を試みた。

その内容と結果を、以下に記す。

### 1) 目的

- ①入学前の早い段階から、介護福祉士資格取得のためには、国家試験を受験する必要があることを認識させ、合格を目指すための意識を高めること。

- ②国家試験の内容について理解を促すとともに、専攻科での学びの動機づけを早期に行うこと。及び、学習方法の指導、合格基準等について理解してもらう。

- ③国家試験出題基準等についても説明し、資格取得ルートの変更点の説明に加え、国家試験の仕組みも理解してもらう。

### 2) 実施内容

日本介護福祉士養成施設協会（以下、介養協）が、毎年実施してきた全国一斉に養成校の学生を対象に実施している「卒業時共通試験」（以下、共通試験）の過去の問題を配布する。

配布段階では、まだ専門的には学習していない内容であるが、課題の配布と提出を課し、採点后、不正解問題の再提出を月1回のペースで3回実施した。

なお、提出にあたり、自主提出とし催促や強制はしないことにした。これは、受験意識、及び学習意識を高めることを第一目的としたからである。

また、返却する際には個別に、学習する際に使用する参考書や教科書について、介護関係科目のテキスト、問題集等を提示し、図書館を利用して調べ学習をするように指導し、併せて、具体的な数値目標を個々の学生に設定して努力を促した。

### 3) 結果と考察

対象：平成29年度専攻科入学予定学生28名対象

内訳：男5名、女23名

福祉コース在籍学生19名

（男3名、女16名）

幼児教育コース在籍学生9名

（男2名、女7名）

提出については、3回未提出者が1名おり、2回未提出者が1名であった。催促や強制をしないで実施したにもかかわらず、提出状況は良かった。しかし、採点後の再提出は、一部の学生だけで偏りがあった。催促や強制はしなかったにもかかわらず提出状況が良かったことは目的の一つであり、評価できる。しかし、未提出者は同じ学生であり、採点後の再提出は一部の学生に偏っていたことは着目すべき点である。

原因はいくつか考えられるが、難しい、思うような点が取れないなど、まだ学んでいない内容であったために学習意欲に差が生じたのではないかと推測できる。

入学前指導で実施した過去の問題等の結果を国家試験の合格基準に照らし合わせてみると、入学前の時点では3割程度の学生が合格圏内におり、他7割の学生が総得点の6割に到達していなかった。

目標点の提示といった具体的な目標、到達点を設定

し、目指す方向を示したが、個々の学生の学習態度や意欲の確認は今後の課題である。

また、マークシートの適切な塗りつぶしができない学生が多い。マークシート記入に関する指導も強化すべきである。

以上のことから、入学前指導の受験対策としては、問題の難しさだけでなく、解くことの面白さというものを学生が身をもって体験できるような機会を作っていくことも必要と考える。また、3回の提出後、採点して返却し、間違い箇所を直してから再提出としたが、なぜ間違っただかということ調べない状態で最初と違う箇所にマークし、再提出する者がみられた。それでは再提出の意味をなさないため、間違い箇所は内容を調べ、ノートへ記載し提出することなども加えていくべきであった。

さらに、配布する問題の作成も最初から専門用語を用いた問題ばかりではなく、様々な参考書を教員同士で検討し、イラストなどで視覚にインパクトのあるもの、幼児教育科で学んだ内容とも関連づけられるような問題も準備し、学生自身に興味と自信を持たせる方法も検討すべきであった。

### Ⅲ. 入学後指導

入学早々、1年間の授業の流れと同時に再度、国家試験の仕組みを確認させ、日々個々の自己学習を大事にするよう伝えて専攻科での1年をスタートした。

授業では、本学の養成課程で唯一選択必修科目である「社会福祉演習」の中で、シラバスにも明記し国家試験受験対策科目と位置付けた授業を行っている。

この科目を中心にして、国家試験に向けたプログラムを作成し実施してきた。

まず、年2回の模擬試験と、介養協で行う実力評価

試験（今年度から、卒業時共通試験から名称変更）を目標に、自己学習のために、全員、共通のテキスト、問題集、参考書を用いて、国家試験に向けて互いに競争意識を持たせ、過去の問題、模擬問題を中心に点数はあまり気にすることなく徹底的に行うことを課した。この時、間違っただか箇所は単に視覚による理解に終わることなく、調べ学習を行いノートに書きとめること、問題集は解説の載っているものを使用しているため、その活用方法等についても助言した。しかし、実際にどの程度実施しているのか、どの程度自己学習をしていたのかといった点には疑問が残っている。

また授業では、教科書と合わせて講義・演習を行い、わかりやすい問題を作成するよう心掛けて行い、スマートフォンアプリケーション等の紹介も行い、時間を見つけて実践するよう、適宜、質問、解説を行いながら進めた。

さらに、前期試験内容は、国家試験出題基準も勘案しながら教科書の範囲をどこまで理解しているか確認するような内容の問題作成を行い実施した。

加えて、「医療的ケアⅡ」の演習時間は、教員2名が1名の学生に付いての指導、評価を行っているため、演習や吸引・経管栄養シミュレータでの練習を行っていない学生に対しては、空き時間を利用して対策ドリルとして難解と思われる問題を作成して配布、学生間で自己学習できるよう用意した。それらの課題の解答後は、教員に提出させた。

また、中央法規出版で実施している模擬試験を7月に実施し、試験結果は、8月下旬に各学生に配布した。

そのような経過の中で明らかになったことは、本学の学生は、社会の理解、障害の理解、介護の基本、こころとからだのしくみの科目が弱いということである。（表1）

（表1）平成29年度 介護福祉士全国統一模擬試験（中央法規出版）平均得点率

得点率順位	グループ	科目名	得点率
1	人間と社会	人間関係とコミュニケーション	85.0%
	こころとからだのしくみ	発達と老化の理解	
2	人間と社会	人間の尊厳と自立	80.0%
	介護	コミュニケーション技術	
3	医療的ケア	医療的ケア	74.0%
4	総合問題	総合問題	73.3%
5	こころとからだのしくみ	認知症の理解	73.0%
6	介護	生活支援技術	72.7%
7	介護	介護過程	66.3%
8	こころとからだのしくみ	こころとからだのしくみ	60.8%
9	介護	介護の基本	51.0%
10	こころとからだのしくみ	障害の理解	49.0%
11	人間と社会	社会の理解	35.0%

これらの科目については、他の科目以上に学習を進めていく必要がある。

「介護の基本」は、介護福祉士の資格取得を目指す学生にとっては非常に重要な科目である。「介護の基本」の国家試験の出題基準は、介護福祉士を取り巻く状況、自立に向けた介護、介護実践における連携、介護従事者の倫理、介護における安全の確保とリスクマネジメント等であり、何れも、介護福祉士としては把握しておく必要があるものばかりである。しかも、求められる介護福祉士は、多職種の中でも中心的な存在となり、一番身近な存在として利用者に合わせたケアへ形を合わせながら介護を提供する役割があり、利用者だけではなく、家族や地域も見据えての制度や内容についてもしっかりと理解しておく必要がある。

しかし、現在は学生という立場から、職業倫理や労働安全等においては想像することが難しい内容である。そのため、より具体的な例を用いる説明や実習での学びを結び付けることにより、学生は理解を深めることになると考えられ、「介護の基本」については、前期後期にわたり介護の基本Ⅰ～Ⅴに学ぶ内容を分け、専任教員2名、非常勤講師2名の4名で担当する授業を行っている。よって「介護の基本」の中でも、科目間の内容につながりがあるものであることを教員間でも認識し、学生へ伝えていかなければならないと考える。

また、理解力の低い科目については、科目間に重複する内容でもあるため、科目間のつながりも意識した内容の整理や、言葉の整理を学生に意識的に促していくことがこの科目を学習する上でのポイントとなるだろう。

「社会の理解」の国家試験出題基準は、生活と福祉、社会保障制度、介護保険制度、障害者自立支援制度、介護実践に関連する諸制度が主な項目となっている。出題基準からわかるように、制度についての出題が大半である。特に制度については、自ら関心を持って意識しなければ記憶に残らない部分であるため難しさを覚えると推測できる。しかし、これから介護福祉士として利用者を取り巻く様々な環境について、アセスメントしていき、介護計画につなげていく基礎知識となるため、制度についてはしっかりと学習すべきものであり、利用者や家族を守るための根拠となる制度について理解することは、生活支援を実践していく学生にとっては重要な学習となる。

「こころとからだのしくみ」の国家試験出題基準は、こころのしくみの理解、からだのしくみの理解、身じたく・移動・食事・入浴・清潔保持・排泄・睡眠のそれぞれに関連したこころとからだのしくみ、死にゆく人のこころのしくみ等であり、「障害の理解」の国家

試験出題基準は、障害の基礎的理解、障害の医学的側面の基礎知識、連携と協働、家族の支援等で、それぞれの科目内容に重複する部分が多い。

人のこころとからだの基礎知識等を学び、「障害の理解」では、「こころとからだのしくみ」で学んだ心身の状態について、障害がある中で生活する上での介護の視点等を学ぶというように、知識が科目間でつながり、学びを深めていくことが有効であると考えられる。

よって、「こころとからだのしくみ」と関連して、「発達と老化の理解」、「障害の理解」、「認知症の理解」が同じ領域に属する科目であり、これらの科目も内容が重複するものが多いため繰り返し学ぶことができ、理解が深まるものと推測できる。また、「介護」の領域は、「生活支援技術」の根拠となる領域となるため、介護実践の実践と結び付けて理解していくことも有効である。

このように4領域（人間と社会、介護、こころとからだのしくみ、医療的ケア）全てにおいて連動しているということを、その都度学生に伝えて自己学習をしていくことが重要である。

また、問題によっては暗記の部分も多いが、学習するにあたって暗記をすることは苦痛、苦手であると訴える学生が多い。国家試験は、介護福祉士として必要な一定の知識及び技能の水準を図るために行われるため、繰り返し行う個々の学習の量と学習の質、理解度で個人差が大きく分かれるところであると考えられる。

後期は、全体的に正答率が低い科目等を分析し、国家試験までの間どのように学生に学習させるか教員間で検討し、苦手科目を重点的に学習させる予定である。

#### IV. 考察（これまでの取り組みから見えてきたもの）

本学の専攻科の養成課程は1年間であり、入学から1月の国家試験までの10か月間で「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」「医療的ケア」という4領域の学習を終了し、国家試験の本番を迎えなければならない。

1年間の養成課程で国家試験が義務付けられたことは、カリキュラムの進捗にも影響を与えかねない状況がある。例えば、前後期のカリキュラムの配置や実習の時期等にも影響を与えかねない。

また、受験対策の難しさに加え、1年課程の特色を活かした授業内容にも検討の余地があるのではないだろうか。つまりそれらは、学ぶという観点から自ら学ぶ姿勢というものが、短大の2年間でどれほど学生に根付いているか、根付かせたかということまで遡って考えなければならない。

以上のことも鑑み、国家試験とはどのようなものかということをしてできるだけ早い段階に意識づけることは重要である。そのためには、介護や福祉については学習前で、知識も少ない事実があったとしても、入学前から学ぶ内容に触れ、意識を高め、学習する機会を作っていくことは大事なことと考えられる。

つまり、厳しい学習過程になっていくことは逃れられない状況ではあるが、最初に感じる不安等の学生の気持ちを我々教員が流さずに気付き、受け止めていくことが重要となる。今後の学習予定や内容について伝え、それに今から向かっていくという見通しを学生が理解できれば、漠然と抱える不安の軽減にもつながるものといえる。

これまでのように、漫然と問題をこなし提出することで終わりとするのではなく、問題に触れてみてどうだったのか、それを踏まえて今後はどのように学習をしていく必要があるか、学生に問うことで学生自身が気付き、自ら学習行動に移すというようなフィードバック効果を期待した指導が必要である。

今回入学前に課題の採点や結果を伝える機会を設け、入学前より学生と教員がコミュニケーションをとることを試みた。そうすることで、入学後の学生との関係性や、専攻科での学びに大変意義があることであり、学生の学習意欲を高め、大学生活の満足度にも影響を与えていくと推測できる。

現時点で、学生の様子からは、筆者らはまだ国家試験へ立ち向かう意識というものの手ごたえは感じられない。故に、具体的な数値目標を示し学習意欲を高めていく土台作りに本腰を入れて取り組んでいるところである。

こうした事実から、初めの段階は教員側からの課題を与え学習すること、教員が示す方法で学習するように勧めてみるというような受動的な学習から、徐々に自己学習する方法へと導き、学生一人ひとりが継続的に学習し能動的な学習へと意識を変えていく取り組みも大きな鍵を握ることになる。そのためには、クラス全体が同じ目標を持ち、同じ方向に向かわせる体制、雰囲気作りといったものも早い段階で作るべきだったと反省している。しかし、すでに自分で勉強方法を確立している学生や確立しつつある学生もいる半面、なかなか確立することができず、別方向を向いている学生もいる。待たなしの時期にきている以上、そういった学生には厳しい状況にはなるが、自分自身に対する甘えは許されない意識を持ってもらう必要がある。

そこで、今後の課題について整理してみる。

#### ①教員サイドの課題

##### 1) 段階的、継続的な学習計画の作成

入学時から国家試験まで、段階的、継続的に学習が進んでいくような計画を作成し、教員の役割分担などを明確にし、受験対策が円滑に行えるような体制を整える必要がある。今後更に、教員の負担が増加することになるため、国家試験対策関連の過去の問題、学生の成績状況などの共有化を図るとともに、国家試験対策の業務が主担当者に偏らないよう教員が連携して、効率的に行うことが重要である。

##### 2) 学生の主体的な取り組みの推進

学生の主体的な取り組みは、成功の要である。入学時から、学生の主体的な取り組みを引き出し、履修状況を把握しながら、目標達成までの支援を行うようにする。

具体的な担当や方法については、計画を策定して実施する。

##### 3) 教員の国家試験内容の熟知と授業力向上

関連科目授業時等に復習の機会を設けることにより、最後まで責任をもって学生が理解を深めるような授業や支援を行うことが必要である。

##### 4) 実技や実習の経験を活かした学習の推進

「生活支援技術」や「コミュニケーション技術」、「介護過程」、「介護の基本」などの科目は、実践に基づく判断が求められる科目である。特に、「生活支援技術」は問題数も多く、基礎知識や実技の力が問われる。技術系の科目は、知識・理論系に比べ得点しやすい傾向にあり、知識・理論系が苦手な学生にとっては、ここで得点することは、全体の底上げにつながる。「得点しやすい所で確実に得点する」ことを学生に理解させ、より効果的な成績向上につなげる必要がある。

#### ②個別指導の充実

##### 1) 学生の主体的な取り組みの支援

学習習慣や受講態度が身につけていない学生が多い中で、入学時からの授業において、基本的な姿勢について日頃より観察し、指導・助言を行う。また、自己学習については、課題を提供し、解らないところは自ら調べ質問するという学習習慣を身に付け、学生の個別状況に応じて継続的に支援していく必要がある。

##### 2) 成績低位の学生への個別支援

入学する学生の2～3割の学生は、全体的な取り組みの中だけではついていけない学生も見受けられる。このような学生は、読み書き、問題の理解、知識の活用など基礎的学力が若干劣っていると感じられ、全体の中で同一に学ん

で成長していくには厳しい状況にある。短大での2年間の学習過程で、基礎学力をつける時間的な余裕はないため、個別指導の時間を設定し、過去問題を解きながら基本的理解を深めるなどの方法で、より手厚く支援し、学生自らが達成感を得られるような支援を行っていく必要がある。

以上、課題を抽出したが今年度の結果はまだ出ていない。国家試験終了時には、どの程度の結果が出ているかは不明であるため、今後、より学生への成果が得られるよう、具体的な形にして来年度以降取り組んでいくことにしたい。

## V. おわりに

これまでの本学の教育目標は、介護福祉士としての質の高い専門性と、社会人としての人間性を意識して養成してきた経緯がある。今後は、本学の基本方針を堅持しながら、専門性をより高めるツールとして受験対策を充実させるというスタンスに立つべきである。

しかも、1年かけて進めていく受験対策が、本来の介護福祉士養成校の目的からかけ離れて予備校化してはならない。加えて、学生の負担感・不安を増すばかりが先行するようでは、本来の養成からかけ離れてしまう危険性がある。いかに、そういった負担感や不安を軽減しながら、介護福祉士としての総合的な学びと、介護福祉士としての意欲と希望につながるように、自らが学んで成長していく喜びを感じられるような支援にしていきたいと考えている。

それには、これまでの、①基本を確実に学ぶ授業、②個別支援の充実、③総合的な受験対策を3つの柱として、この検証で得た課題を踏まえて、今年度中に筆者らで検討を重ね、下記に記す内容をより明確で具体的な内容にして来年度につなげたいと考えている。

- 1) 入学前の段階で、過去の問題等の課題を解かせる。このことは、意識づけと共に、自分の実力を知るためである。
- 2) 入学後、数回の課題提出を行わせる。早期からの受験対策の一環として位置付け、単に解いて提出を促すばかりではなく、定期的に個々の学生の自己学習の進捗度や達成度を把握し、学生一人ひとりの理解度や学習方法を確認しながら、個々の実力を伸ばすために具体的に数値目標を設定し、苦手科目の克服に向けた指導・助言を行う。
- 3) 前後期の授業科目全体の見直しを図り、非常勤講師を含めた国家試験へ向けた授業体制づくりを通して、教員の授業姿勢、国家試験へのモチベーションをアップさせ、教員も学生と一緒に国家試

験に向かって戦っている姿勢を学生に伝える。

4) 受動的な学習から能動的な学習へと意識を変えていくために、国家試験に向けてクラス全体の体制や雰囲気づくりを学生主体で進め、互いの競争意識も持たせる。また、基礎学習能力が低く個別的な指導が必要な学生に対しては、定期的に学習方法の確認や学習の進捗状況の確認を密に行い、継続した学習となりえる指導を行う。

5) 学生とのコミュニケーションをこれまで以上に図り、クラス全体での目標達成に向けて士気を高めていく関わりをすること。特に、個々の学生の努力や成果、成長といったものを褒める、認めるといったことを重要視した関わりを持つよう努める。

以上、これまでの受験対策から課題を抽出し今後の方向を示したものである。

前述したとおり、本学のような1年の介護福祉士養成課程では、国家試験に向けて取り組める期間は実質、入学後から10か月である。

平成37年(2025)には団塊の世代が75歳に達する年齢を迎える。介護保険制度を支え、今後も増え続けることが推計されている認知症の介護と地域包括ケアシステムを支える人材育成を担う介護福祉士養成教育の社会的責任は大きい。

また、筆者らの先行研究で述べた、国家試験を見据えた今後の教育視点として、まず、考えながら介護する力を育てていきたいという意識をもって教育にあたりたい。

介護福祉士の社会的評価を高め、介護福祉士への期待と信頼を向上させ、若者が憧れる魅力ある専門職に育てていくこと、国家試験合格という大きな目標を達成し、学生の今後の生活における自信へと結びつけたい。介護の世界は、知識の習得だけでは成り立たない世界である。人間性の成長も意識して介護福祉士養成を心がけていきたいと考えている。

28名全員が国家試験合格となることは大きな目標であるが、合格や資格取得そのものだけでなく、そこまで努力した過程があるということに自信を持つことができれば、今後生きる糧となるはずである。国家試験合格という大きな目標に向かい進んでいく姿勢というのは、将来社会人となり、介護や保育等専門職者として現場で働く際に、さまざまな困難にぶつかっても、乗り越えられる力となるものと確信している。

「学習＝知識の習得」だけではなく、自分に負けずに戦った自分の力を、これからの生活の原動力にしてほしい。

この国家試験への挑戦が、さらなる人間性の成長の

一助にもなり、強く、逞しい介護福祉士を送り出した  
い。

今後の介護福祉士養成にも大きな転換期となり、養  
成校としての生き残りをかけた戦いが始まっている。

本学で学んだ1年間という短期介護福祉士養成課程  
の中で、いかに、保育士、幼稚園教諭二種免許状、介  
護福祉士の資格を持つ、質の高い人材を育てる使命は  
ますます大きくなった。本学の幼児教育の養成課程も  
踏まえながら、この3つの資格が、同一の学校で取得

できた強みを、自信と誇りに変えて仕事のできる人材  
であってほしいと切に願う。

#### 註

(註1) 荒木隆俊 「介護福祉士資格取得一元化に向  
けた、教育視点のあり方(1)」 羽陽学園短期大学紀  
要第10巻 第3号 2017 p.29-38

## SUMMARY

Takatoshi ARAKI,  
Yasuko MIYACHI,  
Mizuki MATSUDA,  
Kazuo ITO:

Care Workers Qualification Acquisition Unification(2)  
- Match of a State Examination Measure and Problem -

A nursing care workers state examination was required to a nursing care workers education school graduate from this fiscal year, too. This fact is uneasy about exerted influence with the one which also has a big influence on a nursing site for a nursing care workers education school.

So writing is looking for a problem from the former match about a nursing care workers state examination measure in the science.

(Uyo Gakuen College)

